

実習予定表のあり方と課題 The Norm and the Agendas of Internship Schedule

石橋 郁子 関 好博 井上 理絵 松居 紀久子 西井 啓子

ISHIBASHI Ikuko SEKI Yoshihiro INOUE Rie MATSUI Kikuko and NISHII Keiko

【要約】

学生が実習の目的を達成するためには、効果的に実習が展開される必要がある。そのためには、指導者が計画的に実習を構成することが重要である。つまり、実習計画が重要な役割を果たすことになる。効果的に実習を展開するうえで、「実習計画表」が用いられる。「実習計画表」は、養成施設が教育理念や実習ごとの教育目標を実習施設に対して説明し、個々の実習生に合った実習目標の設定と、実習目標が達成できるよう事前に実習計画を立案したものである。本学では「実習計画表」のことを「実習予定表」（以下、予定表とする）と称しており、実習施設側が作成して学生に提示する方法をとっている。しかし、実習施設によっては必ずしも作成されていない等の現実がわかってきた。

本研究において、学生が実習をとおして予定表をどのようにとらえ、また、どのように活用しているのかを明らかにし、予定表の存在意義について再確認した。

キーワード 実習計画 実習予定表 実習指導 事前準備 実習効果

【はじめに】

本学における介護実習の目的¹⁾は、「学内で修得した専門知識・技術・倫理を多様な介護現場で応用し、高齢者・障害者の心身の状況に応じた生活支援を行う上で、必要な基本的能力を養う」ことである。実習は、利用者それぞれに異なった援助の実験を体験することで、個別性を理解する場でもある。安酸²⁾は、看護師養成教育の経験をとおして、実習とは「学内の講義や演習では学べないことを、有形・無形に学ぶ機会にあふれている」と、広範な成長を育む教育の場であると述べている。そのため実習は、学生自身による介護福祉士としての学びはもちろん、指導者による意図的なかかわりが不可欠である。学生が実習成果をあげるためには、実習予定表こそ、実習を展開していくための「骨子」とすべきものと考えられる。

2009年のカリキュラムの改正に伴い「介護Ⅱ」の実習をおこなう介護実習施設では、実務経験が3年以上で、実習指導者講習会を修了した実習指導者を置くことが義務付けられた。介護福祉士実習指導者講習会^{注)}は、「介護の基本」「実習指導者の理論と実際」「介護過程の

理論と指導方法」「スーパービジョンの意義と活用及び学生理解」「実習指導の方法と展開」「実習指導における課題への対応等」「実習指導者の対する期待」の 7 科目で 25 時間以上の履修が必要とされている。その中には、実習生個々の実習指導計画書の作成と指導目標の内容が含まれている。この実習指導計画書と指導目標を含んだものを、学生の視点で、実習の過程を示したものが予定表である。

ところが、巡回指導時に教員が予定表を確認すると、すべての実習施設において作成されていない現実が見られた。また、介護業務の項目を羅列したもの、毎日同じ項目の繰り返しとなっているもの、その日の実習指導者が明記されていないものなど、予定表として意図したものではなく、実習期間のスケジュールの役目でしかないものが多いことが分かった。

介護実習の成果を高めるためには、事前に個々の実習生にあった実習計画を立案することが重要である。予定表のあり方と実習の効果に関する丸山ら⁴⁾の研究では、「学生が実習計画表というツールを用いて実習目標を達成して充実感のある実習をするためには、教員の実習前や実習中の指導力や調整力が必要不可欠」と述べ、教員の指導力や調整力に留まらず、予定表の意義とそれを用いた実習のすすめ方を指導することの重要性にふれている。

そこで、学生は予定表をどのように受け止め、実習中にどのように活用しているのか、学生の側から見た予定表の役割を明らかにし、学生の実習時における予定表の意義をこれからの実習指導に活用するための基礎資料を得ることとした。

I 研究目的

学生の予定表のとらえ方と活用方法を明らかにすることで、予定表のあり方や課題について考察する基礎資料を得る。

II 研究方法

1. 調査日：平成 28 年 11 月 7 日（金）
2. 調査対象：本学福祉学科 1 年生 38 名および 2 年生 32 名
3. 調査方法：アンケート調査

両学年とも実習終了後にアンケートを実施した。同日の同時間に、学年別に教員が調査項目を 1 つずつ読みあげ、その場で記述する方法とした。

4. 調査項目：下記の 9 項目である。

①予定表の配布の有無、②配布の時期、③受け取った時の思い、④指導者からの説明の有無、⑤ミニカンファレンスや反省会時の予定表を基にした指導内容、⑥予定表の活用場面、⑦予定表の効果、⑧予定表の配布がなかった実習生の思い、⑨予定表に関する意見・感想（自由記述）

5. 分析方法：学年ごとに集計し、SPSS 24.0 For window7 で単純集計を行った。
6. 倫理的配慮：無記名で自書式とし、個人が特定されないよう全て統計処理をおこない、結果は本研究以外に使用しないことを口頭で説明し、了解を得たうえで実施した。

Ⅲ 結果

分析対象は、1 年生 38 名と 2 年生 32 名を合わせて 70 名のうち、白紙回答をした 1 年生 1 名を除外した 69 名である。有効回答率は、98.6% である。1 年生 37 名の性別は、男性 10 名、女性 27 名である。2 年生は 32 名で、男性 11 名（うち社会人 2 名）、女性 21 名（うち社会人 3 名）である。

1 予定表の配布の有無と時期

1 年生は 81.1%（30 名）、2 年生は 90.6%（29 名）、全体で 85.5%（59 名）が予定表を受け取っていた。逆に受け取っていない学生は、全体で 14.5%（10 名）、1 年生が 18.9%（7 名）、2 年生が 9.3%（3 名）であった。（表 1）

配布された時期は、実習開始前の事前訪問が全体で 42.4%（25 名）、1 年生が 46.7%（14 名）、2 年生が 37.9%（11 名）である。なお、実習の初日に受け取った学生は、全体で 57.6%（34 名）、1 年生は 53.3%（16 名）2 年生で 62.1%（18 名）である。（表 2）

学年	受け取った (%)	受け取っていない (%)	合計
1 年生	30 名 (81.1)	7 名 (18.9)	37 人
2 年生	29 名 (90.6)	3 名 (9.3)	32 人
合計	59 名 (85.5)	10 名 (14.5)	69 人

学年	事前訪問時 (%)	実習初日 (%)	合計
1 年生	14 人 (46.7)	16 人 (53.3)	30 人
2 年生	11 人 (37.9)	18 人 (62.1)	29 人
合計	25 人 (42.4)	34 人 (57.6)	59 人

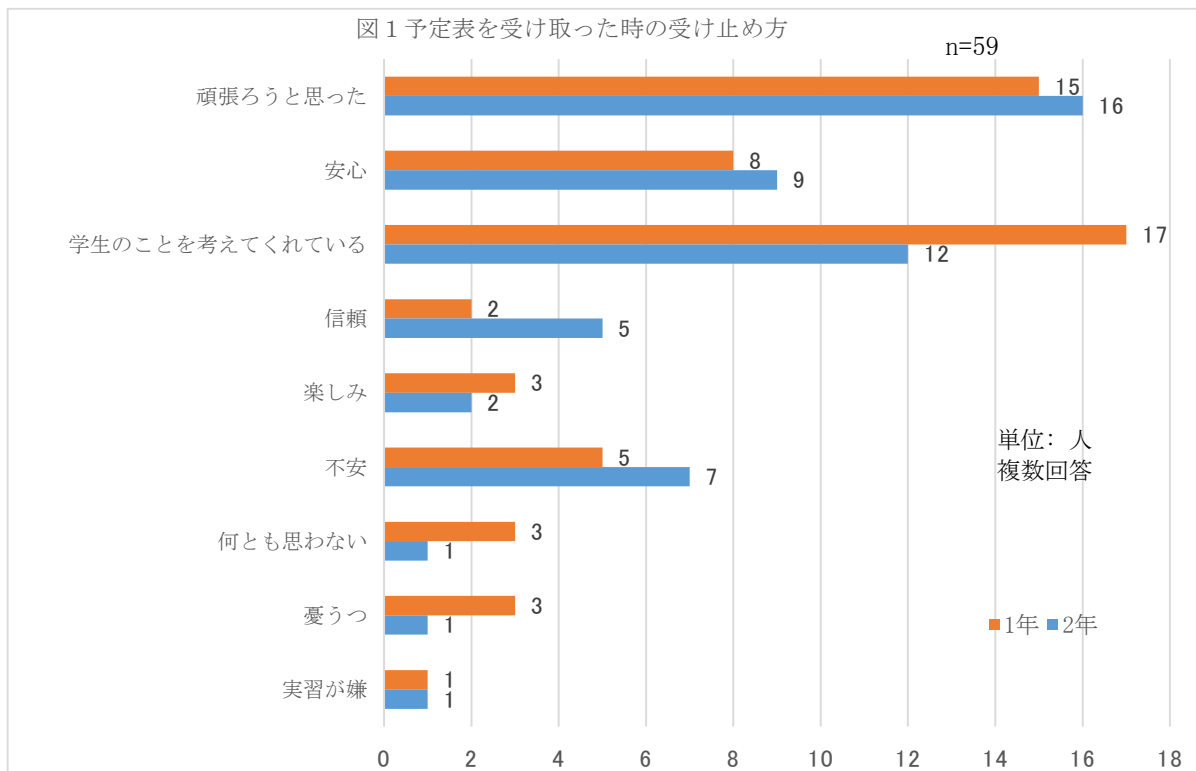
2 予定表を受け取った時の学生の受け止め方

予定表を受け取ったときの思いを肯定的な面と否定的な面の両方で質問をした。1 年生では、「学生のことを思ってくれている」が一番多く 17 名で、次いで「頑張ろうと思った」15 名、「安心した」が 8 名、「不安が募った」が 5 名、「楽しみに思えた」3 名、「なんとも思わない」・「憂鬱になった」が同数で 3 名、「信頼を持った」が 2 名、「実習が嫌になった」が 1 名である。

2 年生では、「頑張ろうと思った」が一番多く 16 名、次いで「学生のことを思ってくれている」12 名、「安心した」が 9 名、「不安が募った」が 7 名、「信頼を持った」が 5 名、

「楽しみに思えた」2名、「なんとも思わない」・「憂鬱になった」・「実習が嫌になった」がそれぞれ1名であった。(図1)

予定表を受け取っていない10名の学生に対し、予定表を受け取っていないことの思いを複数回答で尋ねた。「気に留めない」が8名、「頑張ろうと思った」が4名、「不安感」が3名、「腹が立った」「冷たい」と思った学生は0という結果である。その他では、予定表を受け取っていないが、「ミニカンファレンスで説明を受けた」や「実習中に職員から度々説明を受けた」と1年生からの記入が見られた。



3 予定表の説明の有無と説明の内容

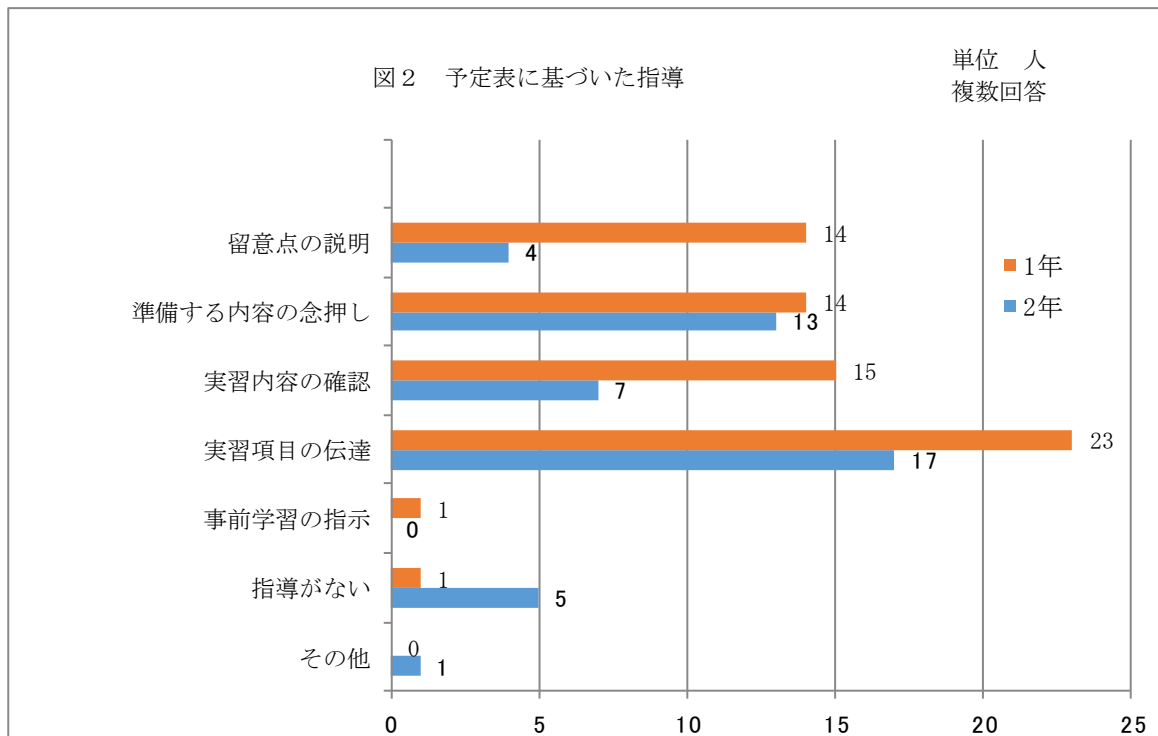
予定表の説明の有無への質問では、全体で83.1% (49名)の学生が「説明あり」と回答している。1年生では90% (27名)、2年生では75.9% (22名)であった。「説明がない」と回答した学生は全体で10名であった。1年生が10% (3名)、2年生は24.1% (7名)が「説明なし」と回答している。(表3)

「説明内容」の選択肢は5項目とし、当てはまるもの全て選択することとした。1年生で回答が一番多かったものは、「実習項目の伝達」で23名、次いで「実習内容の確認」が15名、「実習の留意点の説明」・「準備する内容の念押し」がともに14名、「事前学習の指示」・「指導がない」は、ともに1名であった。

2年生の回答で一番多かったものは、「実習項目の伝達」で17名、次いで「準備する内容の念押し」が13名、「実習内容の確認」が7名、「指導がない」が5名、「実習の留意点の説

明」が 4 名、その他 1 名という結果になった。(図 2)

学年	説明あり (%)	説明なし (%)	合計
1 年生	27 人 (90.0)	3 人 (10.0)	30 人
2 年生	22 人 (75.9)	7 人 (24.1)	29 人
合計	49 人 (83.1)	10 人 (17.0)	59 人



4 ミニカンファレンス、反省会における予定表を用いた指導

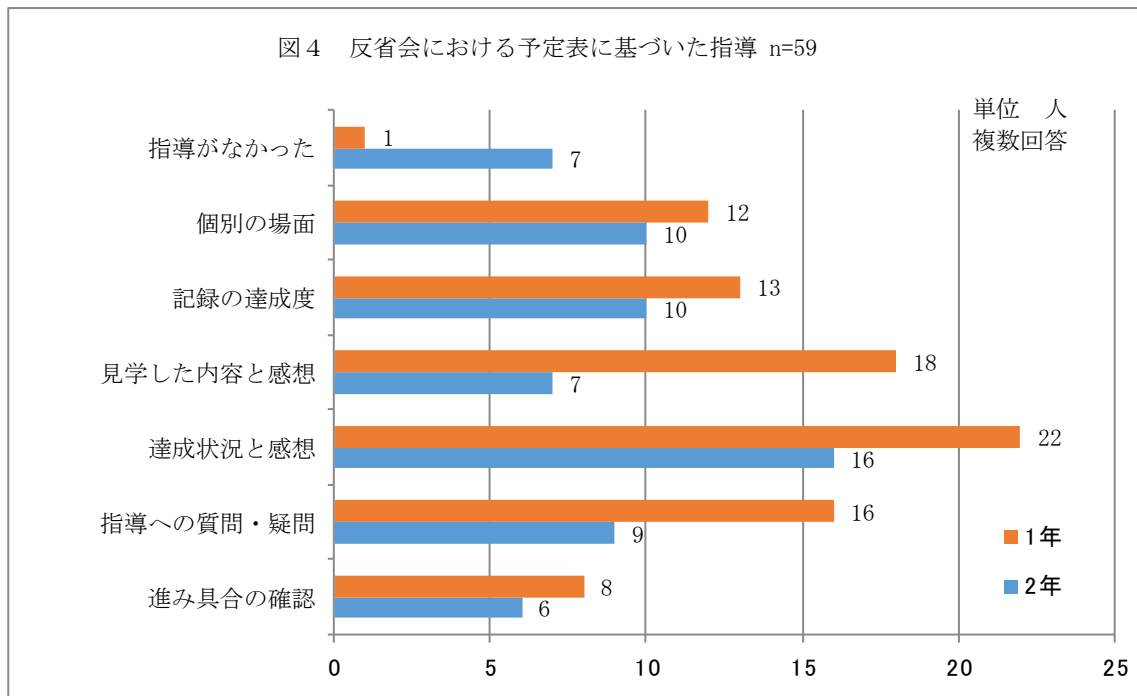
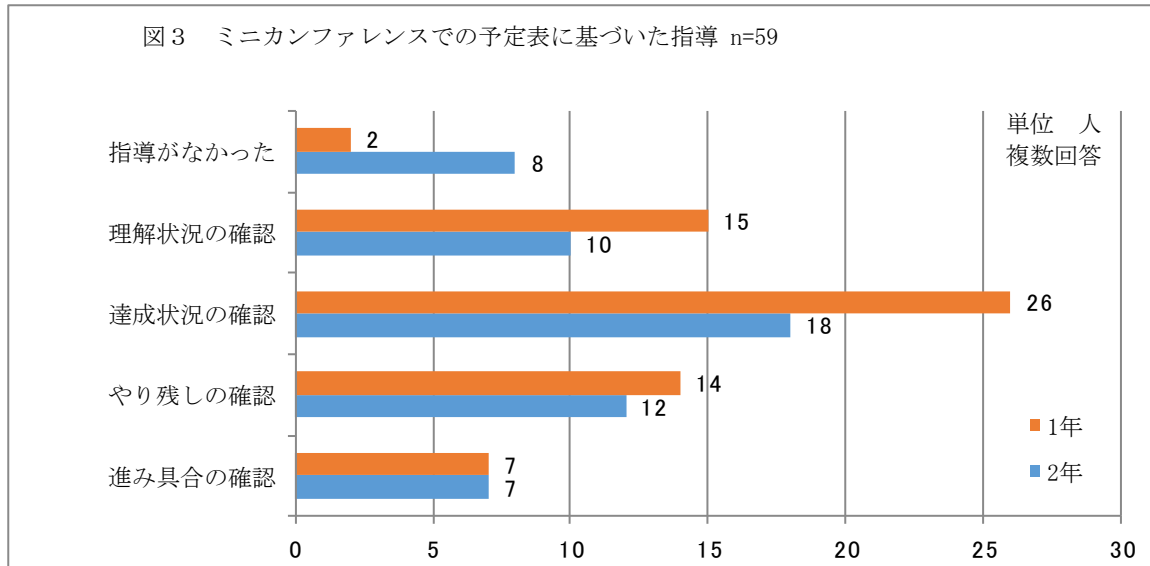
実習指導者と学生が一日の終わりに 30 分程度の振り返りを行うことを「ミニカンファレンス」と称している。そのミニカンファレンスで、予定表を用いた指導が行われているのかとその内容についての質問を複数回答で調べた。1 年生では、「達成状況の確認」が一番多く 26 名である。次いで「理解状況の確認」が 15 名、「やり残しの確認」が 14 名、「進み具合の確認」が 7 名、「指導はなかった」が 2 名であった。

2 年生では、「達成状況の確認」が一番多く 18 名である。次いで、「やり残しの確認」が 12 名、「理解状況の確認」が 10 名、「指導はなかった」が 8 名、「進み具合の確認」が 7 名という結果になった。(図 3)

実習最終日の反省会における、予定表を用いた指導について質問した。1 年生は「達成状況と感想」が 22 名で一番多く、次いで「見学した内容と感想」が 18 名、「指導への質問・

疑問」が 16 名、「記録の達成度」が 13 名、「個別の場面」が 12 名、「進み具合の確認」が 8 名、「指導がなかった」が 1 名であった。

2 年生では、「達成状況と感想」が 16 名で一番多く、次いで「個別の場面」と「記録の達成度」がともに 10 名、「指導に対する質問や疑問」が 9 名、「見学した内容と感想」・「指導がなかった」がともに 7 名、「進み具合の確認」が 6 名という結果である。(図 4)

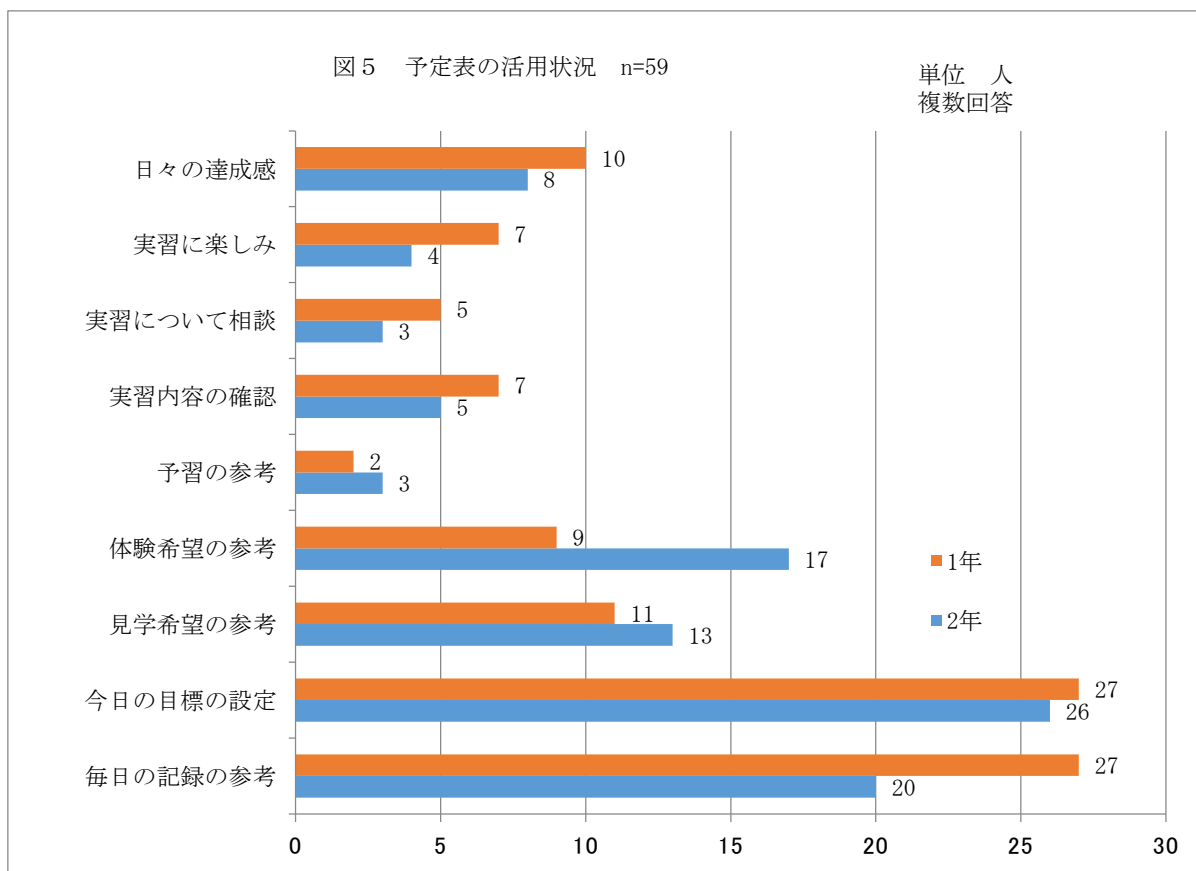


5 実習中における予定表の活用

学生が実習中にどのように予定表を活用しているのかを質問した。9 項目設定し、当ては

まるもの全てを選択することとした。1年生では、「今日の目標の設定」と「毎日の記録の参考」が一番多く 27 名である。次いで「見学の希望の参考」11 名、「日々の達成感」が 10 名、「体験希望の参考」9 名、「実習に楽しみ」と「実習内容の確認」が 7 名、「実習について相談」5 名、「予習の参考」2 名であった。

2年生では、1年生と同じように「今日の目標の設定」が 26 名、「毎日の記録の参考」が 20 名であった。次いで「体験希望の参考」17 名、「見学希望の参考」が 13 名、「日々の達成感」8 名、「実習内容の確認」5 名、「実習について相談」と「予習の参考」がそれぞれ 3 名という結果である。(図 5)

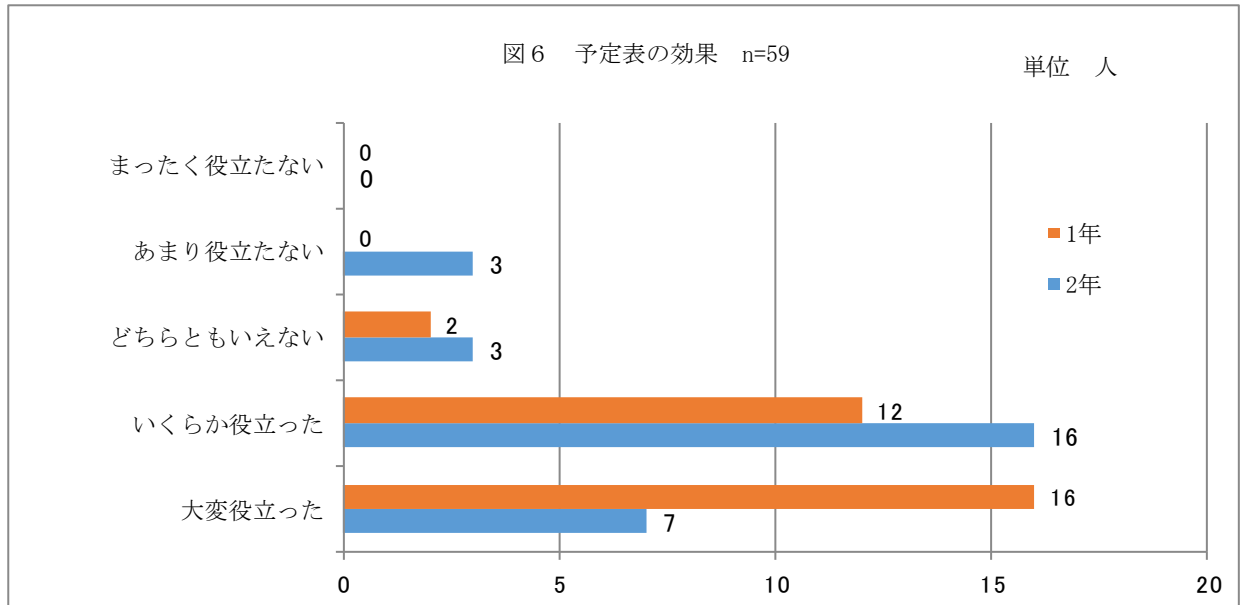


6 実習における予定表の効果

予定表がどの程度役立ったかについて、「大変役立った」「いくらか役立った」「どちらともいえない」「あまり役立たない」「まったく役立たない」の 5 件法で実施した。

1年生と 2年生を合わせて「いくらか役立った」が 47.5% (28 名)、次に「大変役立った」が 40% (23 名) である。「どちらともいえない」が 8.5% (5 名)、「あまり役立たない」が 5.1% (3 名) である。1年生では、「大変役立った」が一番多く 43.2% (16 名)、「いくらか役立った」が 32.4% (12 名)、「どちらともいえない」が 5.4% (2 名) である。「あまり役立たない」と「まったく役立たない」と回答した者はいなかった。2年生では、「いくらか

役立った」が一番多く 50% (16 名)、「大変役立った」が 21.9% (7 名) である。「どちらともいえない」、「あまり役立たない」は、ともに 9.4% (3 名) である。「まったく役立たない」と回答した者はいなかった。(図 6)



7 実習予定表に関する意見や感想 (自由記述内容)

学生の予定表に関する意見や感想を自由記述で回答を求めた。回答は内容ごとにカテゴリー化し、学年別にまとめて表にした。(表 4・表 5)

表 4 2 年生の予定表に関する自由記述

内容	カテゴリー (件数)
内容に対する 要望	指導担当者の名前がほしい (3)
	学生の事前レポートをもとに予定表を作ってほしい (2)
	日々の実習の予定の違いが分かるものにしてほしい (2)
	実習内容をもう少し詳しく書いてほしい (2)
	項目の内容を何時から何時までと具体的な時間を書いてほしい
	実習での注意点を書いてほしい
	最終日までの予定を予想でもいいから書いてほしい
	行事なども予定に入れてほしい
	必要なものを書いてほしい
	実習生が実施したいことを書く欄があればよい

予定表を用いた指導に対する要望	実習指導担当者と実際の指導者が毎日違っていたので、予定表に基づいて指導してほしい
	利用者への留意点の説明や進み具合の確認をしてほしい
予定表全体の感想	その日の担当職員の名前が書いてあり、安心感があった (2)
	あると楽、進めやすい (2)
	内容が曜日ごとに書いてあると感じた (2)
	今日はどんなことを行うのか把握できるのでよい
	大まかに何をやるかわかるので、目標を考えやすかった
	4週間の実習で2週ずつの予定表をもらったのはよかった
	生活支援技術を実施できるように、たくさんの方が書いてありよかった。
	空欄のところがあると不安に感じた

表 5 予定表に関する 1 年生の自由記述

内容	カテゴリー (件数)
困ったこと	大まかなことしか書いてなかったので、誰に何をやるのかわからなかった (2)
	予定表だから仕方がないが、予定表どおりにならなかった
	予定表が職員の意向 (業務) で変更になった。どうしたらよいかわからなくなった
	もらわなかったなので、次の日の予定や目標を立てるときにわからなかった。
予定表を用いた指導に対する要望	予定表は絶対に実習初日か事前訪問でもらうべきだと思ったし、あったほうが良かった
	コミュニケーションをとってほしい
	何時から何時までと区切ってほしい
	必要な持ち物を記入してほしい
	もう少し一日の流れがあると、実習に対する意欲がもっと出てきたと思う
予定表全体の感想	実習予定表を事前打ち合わせ時にもらうことで、7 日間のうちに行くことが分かって安心できた (3)
	予定表に必要なものが書いてあってよかった (2)
	予定があらかじめわかるのはとても便利だと思った (2)
	初日は不安と緊張があったが、2~3 日目になると不安や緊張がとれ、実習を頑張ろうと思えた
	入浴実習の時は前日に伝えてもらえたので、次の日の予定がだいたいわかった
	いつ何をやるか書かれてあり、安心できた。

IV 考察

1 予定表の意義と位置づけ

学生の 85.5%が予定表を受け取っていたが、1年生の 18.9%、2年生では 9.3%が受け取っていないことがわかった。学年差が生じた要因は、カリキュラム改正（2009年）に伴う実習施設の要件^{注）}である実習指導者の配置が義務付けられたことが関係していると予測できる。実習指導者とは、実習指導者講習会の修了者である。この講習会では、予定表の作成がプログラムにあるので、当然指導者は予定表に関する認識があると考えられる。一方、1年生の実習では、介護福祉士であればよいことや介護の実務経験が3年であることというのが要件となっている。

予定表を受け取った時期は、学生の 57.6%が実習初日に受け取っているが、事前に受け取っているのは、2年生で 37.9%、1年生では 46.7%である。予定表は、これから始まる実習への興味や関心を育むことや個々の学生の実習目標の達成に向け、実習開始前に提示されることが望まれる。そのために、本学では実習開始 2週間前に施設への事前訪問を設定している。このことは、厚生労働省が示した「高度化モデル事業」の中にも「養成施設が教育理念や実習ごとの教育目標を実習施設に対して説明し、個々の実習生にあった実習目標の設定と実習目標が達成できるように事前に実習計画を立案する」と明記されている。学内での事前学習では、実習の進め方を学生が一人ひとり立案しているが、どうしても抽象的とならざるをえない。事前訪問時に指導者から予定表を提示してもらい、直接説明を受けることで、当日までに実習計画の修正や内容の確認を学内で実施することが可能となる。このことは、実習への学生の意欲を支えていく上でも重要である。

本学の実習区分では（表 6）、2年生の介護過程実習が 4週間（180時間）にわたる。また、実習時期は 8月中旬に始まり、終了は 9月中旬である。一般的に介護職員の翌月の勤務は、その前月の月末から月初めに決まる施設が大半である。その結果、2週間ずつの予定表の作成になる実情がある。

学生は予定表に対して、肯定的に受け止めている結果がでた。予定表を受け取ることで、どの学生も実習への緊張感が安堵感に替わっていることがうかがわれる。予定表は、学生と実習指導者との信頼関係を育むツールとなり、学生の期待感やモチベーションにつながっていく可能性が考えられる。一方、予定表を受け取った時に「不安」の感情を呈している学生が全体で 12名もいる。また、「何も感じない」や「憂うつ」「実習が嫌」という否定感情をもった学生に対する支援が必要である。実習に対する学生の感情に気づき、実習指導者と巡回担当教員との意見交換を適切に行っていくことが課題となった。

学生の予定表の活用率は高く、予定表に対して肯定的な受け止め方をしている。予定表の意義を学生、実習指導者、教員が共通認識し、本学が毎年開催している実習指導者会議・研修会において、予定表作成の意義を継続的に取り入れていくなど、具体的な策を講じていくことが求められる。

表 6 本学における介護実習の区分

実習区分 学年	介護Ⅰ 基礎実習	介護Ⅱ 介護計画実習	介護Ⅱ 過程実習	介護Ⅰ 総合実習
実習施設 種別	①特別養護老人ホーム ②介護老人保健施設 ③救護施設 ④障害者支援施設 ⑤障害児入所施設・療養介護施設 ⑥小規模多機能型居宅介護 ⑦グループホーム ⑧富山型デイサービス ⑨地域密着型介護老人福祉施設 ⑩訪問介護事業所	①特別養護老人ホーム ②介護老人保健施設 ③救護施設 ④障害者支援施設 ⑤障害児入所施設・療養介護施設 ⑥地域密着型介護老人福祉施設	①特別養護老人ホーム ②介護老人保健施設 ③救護施設 ④障害者支援施設 ⑤障害児入所施設・療養介護施設 ⑥地域密着型介護老人福祉施設	①特別養護老人ホーム ②介護老人保健施設 ③救護施設 ④障害者支援施設 ⑤障害児入所施設・療養介護施設 ⑥小規模多機能型居宅介護 ⑦グループホーム ⑧富山型デイサービス ⑨地域密着型介護老人福祉施設
目的	・利用者とかかわりをもつための基本 が分かる。 ・利用者の生活と介護職員の活動を見 学体験して、生活支援技術について 理解を深める。	・受持ち利用者の全体像を把握する 過程を理解する。 ・個々の利用者の特性に応じた生活 支援技術を理解する。	・受持ち利用者のアセスメント・計画 立案実践・評価・修正といった介護 過程のプロセスを全体的に理解す る。 ・自立支援に向けた援助のあり方を 考え、実践することができる。	・さまざまな利用者の暮らし、多様な 介護サービスのあり方を理解する。 ・主体的に実習課題を設定し、介護福 祉士としての基本的な能力を総合的 に身に付ける
1年	90時間	90時間		
2年			180時間	90時間

2 実習の展開における予定表の活用

予定表を基にした説明においては、学生の 83.1%が何らかの説明を受けており、「実習項目の伝達」や「準備する内容の念押し」「実習内容の確認」「留意点の説明」が高い値となっている。指導者の予定表を活用した指導の流れが読み取れた。

毎日のミニカンファレンスや最終日の反省会における指導では、「達成状況の確認」が最も高い。予定表は各々の学生にとって、実習目標がどこまで達成できたかを知る指標にもなる。そして、言うまでもなく実習指導全体を可視化するものでもある。

学生が実習を見とおし、また、振り返るうえで、予定表の効果がどうであったか 5 段階の評価を行ったところ、87.5%の学生が「大変役立った」「いくらか役立った」と回答している。実習に取り組む上で予定表を有効に活用されていることが確認でき、予定表が実習生を支えている実態が明らかとなった。

3 実習の充実感や満足感が得られる実習指導と教員の役割

実習は、介護福祉士として必要な知識・技術や倫理的態度を統合する力を培っていく場である。その際に重要なことは、目の前にいる利用者や実習指導者との関わりから、なぜそうするのか介護実践の根拠を考えることである。実習目的を達成するためには、毎日の実習内容に「どうしてだろうや」「なぜだろう」という関心を持ち、見学や体験を自主的に申し出るようになることが必要である。また、その関心を指導者への質問や相談という形で自己の

積極性を引き出す機会にすることも大切である。予定表を自主的・積極的に活用できるよう、予定表の意義を十分に指導することが重要である。

丸山ら⁴⁾の研究結果から「実習を行う学生に対して、実習計画表の活用への動機づけとしていかに学生に伝わるようにしていくか重要になってくる」と、学生の自主的行動を促す指導の必要性を述べている。

現在、本学では事前学習において、本学作成の「実習の手引き」からプログラムを提示し、実習のイメージがつかみやすいよう実習の事前学習をしている。その後、学生は実習でやりとげたいことを具体化し、自己の目標を明確にして事前のレポートを完成させている。特に1年生は、現場における実習の具体的なイメージがしにくいことから、7日間の基礎実習の流れが伝わる授業の展開が求められる。実際に実習の場で、事前レポートに記述した目標に対し自ら行動できるために、予定表を持ち活用した事前学習の取り組みが課題とされた。

カリキュラム改正以後、実習指導者は養成校が示す実習の区分を把握して、実習の流れをプログラム化した予定表を作成し、大多数が実習を受け入れている。本研究においても全体で85.5%の学生が、実習指導者から予定表の提示を受けている。丸山ら⁴⁾は「実習プログラムとして、学生の実習計画表を取り入れたものを作成することに意義がある」と述べている。学生自身が実習内容を把握し、自分で行動できるよう想像力を働かせ、自己の実習計画につながる事前レポートを作成し、事前訪問時に見せて説明してることが、本来必要とされる予定表につながると考えられる。

教員の役割として、学生の事前レポートが指導者にどのように理解されているか、予定表と関連させ実習がどのように調整されているかなど、実習指導者との連携がより重要視されることになる。実習指導者と直接話し合い、学生の実習に反映させていくことも必要である。また、学生自身が予定表の効果を実感でき、実習全体が充実したものになるよう働きかけていくことが求められる。

IV 結論

学生の実習予定表のとらえ方と活用方法について調査を行ったところ、以下のことが明らかとなった。

- 1 予定表によって学生は実習への意欲を喚起し、指導者への信頼関係の醸成につながっている。
- 2 予定表は、実習期間を通じて、有意義な指導ツールになっている。
- 3 個々の学生にあった予定表となるために実習指導者との検討を重ね養成校としての働きかけが今後の課題である。

4 実習に際して、学生が自主的に行動できるようにする指導のあり方が課題となった。

引用参考文献

- 1) 富山短期大学福祉学科：介護実習の手引き 学校法人富山国際学園富山短期大学福祉学科 平成 29 年
- 2) 安酸史子：学生とともに創る臨床実習指導ワークブック 医学書院 第 2 版第 12 刷 2015
- 3) 公益社団法人日本介護福祉士会：介護実習指導テキスト改訂版 社会福祉法人全国社会福祉協議会 第 1 刷 2015
- 4) 丸山順子：介護実習Ⅱにおける実習指導計画表の活用の検討 ―個別援助技術実習と介護総合実習との比較― 松本短期大学研究紀要 25 巻 P 61-68 2016
- 5) 丸山順子：介護基礎実習における学生の実習姿勢と実習指導体制との関連性 松本短期大学研究紀要 21 巻 P 83-93 2012
- 6) 丸山順子：学生が自ら実習できるための実習計画表の活用 ―実習指導者との連携と実習指導の課題―松本短期大学研究紀要 26 巻 P 49-58 2017

【注】2009 年からのカリキュラムの改正により、「介護Ⅱ」の実習生を受け入れる介護施設は、実習指導者講習会の修了者を置くことが必須となった。介護福祉士の資格を取得して実務経験を 3 年以上有しているものが対象となる。加えて、実習施設の要件は、「厚生労働大臣が別に定めるものであって、次に掲げる要件を満たす施設並びに事業所に適合する施設である」とした。

- ・常勤の介護職員に占める介護福祉士の比率が 3 割以上であること。
- ・実習指導者マニュアルを整備し、実習指導を核とした実習指導体制が確保されていること。
- ・介護サービスの提供のためのマニュアルが整備され、活用されていること。
- ・介護過程に関する諸記録が適切に整備されていること。
- ・介護職員に対する教育研修が計画的に実施されていること。